

愛なる神は愛の対象として人間を創られた。

人間は神に似せられて、神ご自身のかたちに造られました。神を理解する心を与えられ、神と交わり、神とともに生きるようになりました。

神は慈父のように人間に愛を注がれました。その神様の心が人によく通じ、人はその神を喜び、感謝し、神を慕って、神に従います。その人を神は喜ばれ、さらに愛を注がれます。こうして聖い、愛の交わりが永遠に続いていくのです。その対象として人間は創られました。

神はアダム《男》とエバ《女》を理想的な環境であるエデンの園に住ませ、彼らは神の祝福で満ちたこのすばらしい樂園を支配する事が許されました。

その園では、種を持つすべての草と、種を持って実を結ぶすべての木が食物でした。ですから動物が生きていくために、悲鳴を上げたり血を流す事は全くなく、神の愛と平和とが、食生活にも貫かれていました。また園にはさまざまな実を結ぶ木が生い茂り、エデンの園は豊穡そのものでした。

ところが…… 次号に続く

神はこのように、人をご自身のかたちに造られた。

創世記 1 : 27

天を創造された方、すなわち神、地を形造り、これを仕上げた方、すなわち、これを堅く建てられた方、これを形ないものに創造されず、人のすみかにこれを形造られた方、まことに、この主がこう仰せられる。「わたしが主である。ほかにはない」

イザヤ 45 : 18

あなたは園のどの木からでも思いのまま食べてよい。しかし、善悪の知識の木からは取って食べてはならない。それを取って食べるその時、あなたは必ず死ぬ。

創世記 2 : 16 - 17

定期集会

どなたでもおいで下さい

(日) 礼拝と学び	10:30~12:10	(水) 聖書の学びと祈禱会	19:30~
教会学校	13:30~14:30		
夕 拝	19:30~	(金) 聖書の学びと祈禱会	10:00~

子母口キリスト教会 チャペル通信 100号

2015年(福祉特集その2) 石井亮一・石井筆子と滝野川学園

わたしの目にはあなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している。
イザヤ 43章 4節

大河ドラマ**花燃ゆ**の主人公**久坂文**は幕末の武士の娘として激動時代を生きました。これからの終盤では、**小田村伊之助**(**梶取素彦**に改名)と再婚します。梶取素彦は群馬県令などを務め、男爵になりました。その同時代(明治20年頃) **鹿鳴館の華**といわれた貴婦人がいます。**渡辺筆子**といひます。父は肥前大村藩士で、明治政府で要職を務め、叔父の渡辺昇は薩長同盟の周旋をした男でした。**渡辺筆子**は東京女学校を卒業後、皇后の命令でヨーロッパに留学しました。岩倉具視の遣欧使節に最年少で参加した**津田梅子**は**クリスチャン**になりましたが、その梅子とも親交があり**筆子もクリスチャン**になったのでした。筆子が再婚した夫も**クリスチャン**の**石井亮一**でした。**石井亮一**が障がい者教育に踏み出したきっかけは、前号で紹介した**石井十次**が孤児93人を引き受けた、明治23年に名古屋周辺を襲った濃尾地震でした。日本の社会福祉の出発点が震災後というのが、今の私たちにとってなにか示唆を与えられているように思えます。

愛である神様は、この世の最も小さな者にも常に「あなたは高価で尊い」(イザヤ43章)と愛を示してくださり、また「あなたの隣人を愛しなさい」と私たちに言葉を与えてくださるお方です。今月も福祉をテーマに**日本で最初の知的障がい者施設滝野川学園**の創立者の石井亮一・筆子夫妻を紹介します。



石井亮一・筆子記念館 (国立市)

〒213-0023 川崎市高津区子母口776

編集

日本同盟

子母口キリスト教会

発行

基督教団

e-mail shibokuchi@church.jp

牧師 小岩井 信 <http://shibokuchi.church.jp/>

電話 044-766-0181 F A X 044-766-2157



人はだれかを支えている時には自分の事ばかり考えるけど、相手から実はどれだけ恵みをもたらしているかは気づかないのです。

石井亮一

武士の娘として

9月末からスタートした朝ドラ「あさが来た」の女主人公広岡浅子は、商人の娘として波乱に満ちた人生の中で聖書に出会いクリスチャンになっていきます。広岡浅子は村岡花子や村岡花子の妹のハルの夫の賀川豊彦・とともに廃娼運動

に関わり日本女子大学の創立に寄与した人です。同時代に武士の娘として生を受けて、福祉事業に生涯をささげたのが、**渡辺筆子**でした。

ホイットニー宅に英語を学ぶために出入りし、そこで**勝海舟**の妻となるクララとの交流があり、キリスト教の愛の精神の感化を受け弱者への配慮と援助の必要を覚え女子に実業を教える大日本夫人教育会付属女紅学校をつくりました。女紅というと**新島八重**がかかわった京都の**女紅場**を連想します。



教育への情熱

筆子は華族女学校（現学習院女子高校）でフランス語を教えました。教え子にはのちの貞明皇后（大正天皇妃）がいました。早くから女子の教育の必要を覚え津田梅子とともに静修女学校（現津田塾大学）で教鞭を振るいました。

当時の風習では女は親の決めた男と幼いうちに婚約させられています。（「あさが来た」の浅子も同様でした。）18歳で小鹿島栗と結婚し3人の娘を授かりましたが、二人は障がいを持ち、もう一人の子ども急性脳膜炎で死にました。博覧会でのスピーチのため津田梅子と行った筆子は、梅子と別行動でアメリカの障がい児童教育機関を見学しています。母としてわが子の教育に思いを馳せていたのでしょう。

石井亮一のキリストとの出会い

石井亮一は1867年佐賀県佐賀市に生まれ、祖父は佐賀藩家老で父も上士でした。秀才の誉れ高く科学者を目指し工部大学校（現東大理工学部）を受験したが身体検査で不合格となり、留学を目指し英語を学ぶために、**立教大学に入学し**、創立者のC・

ウィリアムズに薫陶を受け、洗礼を受けクリスチャンになりました。留学のため受験しましたがまたも健康診断で不合格となり、立教女学院の教頭になりました。亮一が24歳の時濃尾大震災が起きました。震災で孤児となった女子が娼婦として売買される話を聞いて、憤慨し孤児を21



立教大学

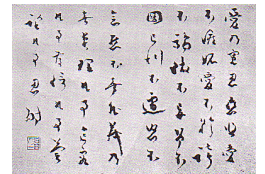


人引き受け私財を投じて**聖三一孤女学院**を開きました。その女児のなかに2人の知的障がいのある子に対し亮一は教育方法を学ぶため渡米しました。そこで知的障がい児教育の権威であった故セガンの教育理論をセガン夫人から学び、各地を巡りその進んだ理論を習得して帰国し、**聖三一孤女学院**を**滝野川学園**と改称し、日本で最初の知的障がい児教育を開始しました。

筆子との結婚

亮一は36歳の時、6歳年上の**渡辺筆子**と結婚しました。きっかけは亮一が静修女学校の講師として招聘されたことでした。亮一が知的障がい児教育を手掛けたことを知り**筆子**が一人生き残った子供の幸子を亮一に託しました。

二人を結びつけたのは、同じキリスト教信仰に基づく教育観の一致と、聖書に示された愛を実践する、お互いの深い人格への尊敬でした。**滝野川学園**（国立市谷保6312）に残る亮一の座右の銘が右の**聖書の言葉**です。本文は漢字文ですが、今の聖書の言葉では**愛は寛容であり、親切です。また人をねたみません。愛は自慢せず、高慢になりません。自分の利益を求めず、怒らず、人のした悪を思わず、すべてを期待し、すべてをがまんし、すべてを耐え忍びます。**（第一コリント13章）となります。



試練を支えた人々

2人の事業は順調ではありませんでした。1921年には子どもの失火で、学園が全焼し、助けに入った筆子は骨折して松葉杖なしでは歩けない状態になりました。昭和の初めの世界恐慌で学園経営は破たんしかけたのですが、多くの人が支えました。とくに貞明皇后は多大な義援金を寄付しました。財界では**渋沢栄一**が支え、学園の3代目理事長になりました。そのほかでは**勝海舟**・**島崎藤村**などがいます。

100号記念プレゼント 星野富弘卓上カレンダー
記事の感想を記入して、
住所 氏名 年齢を明記して葉書で教会まで応募下さい。
抽選で10名さまに送付します。締め切り11月10日

6枚で表が日本語裏は英語訳の詩になって、います7。